



言説の政治

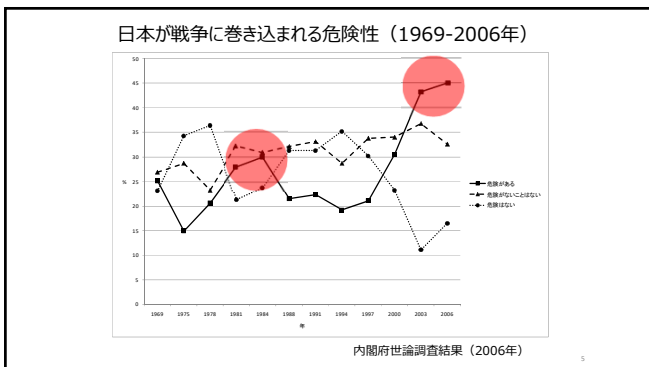
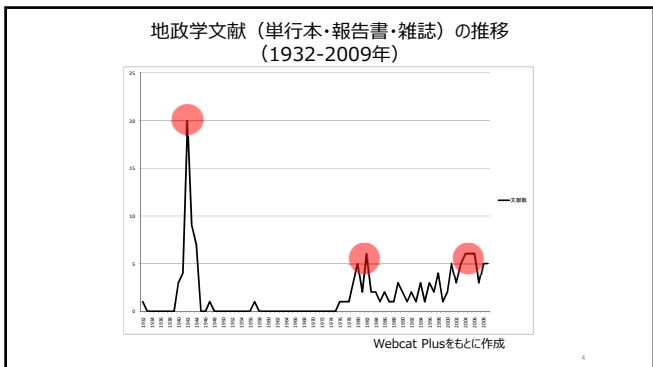
- ・ 批判地政学と言説分析
 - ・ 今日の国際情勢、日本の外交・内政の方向を批判的にとらえる視点と方法
 - ・ 地政学的な言説（地政言説）に着目

2

問題の所在

- ・ 「日本地政学」衰退後の研究の断絶
- ・ 「新しい地政学」の未摂取
- ・ 近年の「地政学」ブーム
- ・ 「地政学」は過去（地理思想史上）の問題か？
- ・ 現代の地政現象を地理学はどう扱うか？
 - ・ 理論的・方法的検討
 - ・ 地政言説→マルチ・スケール

3



自衛隊派遣のレトリック（1）

- ・ 「非戦闘地域」
 - ・ 2001年9月11日の同時多発テロ以降
 - ・ 日本政府（小泉政権）は米国主導の対アフガニスタン、対イラク戦争に自衛隊を派遣し協力
 - ・ 交戦地域に自衛隊を派遣できるのか？

6

自衛隊派遣のレトリック (2)

- ・ 政府説明
- ・ 自衛隊は「非戦闘地域」に派遣され、この地域で自衛隊は憲法の禁ずる武力行使はしない
- ・ 非戦闘地域とは「現に戦闘行為（国際的な武力紛争の一環として行われる人を殺傷し又は物を破壊する行為）が行われておらず、かつ、そこで実施される活動の期間を通じて戦闘行為が行われることがないと認められる」地域で、公海及びその上空と自衛隊の活動に同意する外国の領域（「テロ対策特別措置法」2001年）

7

自衛隊派遣のレトリック (3)

- ・ 野党の反論
 - ・ 非戦闘地域と戦闘地域の区分が明らかでない
 - ・ 具体的な場所が示されていない
 - ・ 自衛隊が武力行使しない保証にならない
- ・ 小泉元首相の答弁
 - ・ (イラクの)どこが非戦闘地域か「私に聞かれたらつてわかるわけがない」、「自衛隊が活動しているところは非戦闘地域です」
- ・ 内閣による派遣先決定
 - ・ インド洋、パキスタン、イラクの非戦闘地域

8



9



10

自衛隊派遣のレトリック (4)

- ・ 2008年に名古屋高裁判決
- ・ 反戦市民グループによる自衛隊派遣差し止め訴訟
- ・ 差し止め請求は却下
- ・ 航空自衛隊の活動地域（イラク領内とバグダード空港）は非戦闘地域の要件を満たさず、憲法違反



11

言説とは (1)

- ・ 非戦闘地域の示し方、解釈の仕方
 - ・ それぞれの政治的立場で異なる→論争・対立・訴訟
- ・ 空間と場所に関わる「真実」をめぐるやり取り
 - ・ 重要な役割を担うのが「言説 discourse」

12

言説とは (2)

- ・ 言説 = 一連の表象・実践・パフォーマンスで、これらの行為を通して特定の意味が作り出され、そうした行為を取り巻くさらなる概念や意味の体系に結び付けられ、正当化される
- ・ アフガニスタン、イラク、サマウは日本政府にとって一体いかなる場所か？
 - ・ テロリストの温床 → 攻撃支持、危険な独裁国家 → 攻撃支持、非戦闘地域 → 自衛隊派遣可能

13

言説とは (3)

- ・ 同時多発テロ
- ・ ブッシュ大統領
 - ・ 自由主義世界に対するイスラム原理主義テロリストの挑戦 = 図式化
 - ・ 世界各国に対して米国が主導する「対テロ戦争」への参加を呼びかける = 拡大化
- ・ 小泉元首相
 - ・ 米国支持、自衛隊派遣による「後方支援」 = 共鳴（世界観の共有）化



14

言説とは (3)

- ・ 「対テロ戦争」というレトリック（修辞）が生み出したもの
 - ・ アルカイダによる米国の攻撃 → 自由主義諸国への挑戦として再解釈 → 世界大での「テロリスト」掃討作戦 = 拡大・正当化
 - ・ アルカイダ（ビンラーディン） → アフガニスタン（タリバーン政権） = 拡大・対象のすり替え
 - ・ さらに2003年のイラク戦争とフセイン政権の崩壊 = 拡大
 - ・ アルカイダとの関係は特定されず = 現実との不一致

15

言説とは (4)

- ・ 複数の話者、様々な表現形態、内部矛盾や現実との不一致
 - ・ 「真実」についての説明とされる
 - ・ 排除される他者（テロリスト、テロリスト支援国家）と包摂される自己（自由主義諸国）の図式も含む

16

地政学の「魅力」と地政言説 (1)

- ・ ガローゲ・オトゥー・ホルの批判的地政学 (Ó Tuathail 2006)
- ・ 地政学 (geopolitics) = 言説
- ・ 地政言説
 - ・ 国家間の競争と権力の地理的な側面を強調した世界政治に関する言説
 - ・ 言葉による表現が、特定の空間や場所をめぐる想像や表象を意味し、歴史的・政治的な文脈の中である種の真実性を持つものとして扱われることがある。その政治的に重要な例。



17

地政学の「魅力」と地政言説 (2)

- ・ なぜこうした言説がもてはやされるのか
 1. 世界が直面する危機について切実な問いを立てる ← 社会不安
例：北朝鮮の核・弾道ミサイル開発の脅威
 2. 複雑な世界を敵と味方に単純に二分する
例：自由主義諸国対テロリスト、拉致被害者対加害国家
 3. 世界情勢の将来を予言しているように見える
例：戦略論的妙案（防衛策）への欲求

18

地政学の大衆化

- ・ 防衛省『まんがで読む防衛白書』
- ・ 平成19年度版のテーマはBMD（弾道ミサイル防衛）
- ・ 国家の機関が地政学説を**大衆化**させる働き
- ・ 現代的な地政学説としての機能を備える
 - ・ 登場人物紹介 / 弾道ミサイルの脅威
 - ・ プロローグ「防衛とは？」（4ページへ）
 - ・ Part1「弾道ミサイルって！？」（10ページへ）
 - ・ Part2「安全保障環境って！？」（20ページへ）
 - ・ Part3「日米安全保障体制」（30ページへ）
 - ・ Part4「BMDの現状と具体的な配備」（40ページへ）
 - ・ Part5「BMDの今後」（50ページへ）
- ・ さらに興味を持ってくれたキミたちに
- ・ 裏表紙

危機の表象



敵（他者）の表象



味方 = 同盟関係の表象



戦略論的妙薬の表象



戦略論の愛国心への接合



地政言説と主体 (1)

- 誰が誰について語るのか
- 警察庁は「来日外国人による犯罪が増加している」と報告（2005年頃まで）
- 来日外国人＝「定着居住者（永住権を有する者）・在日米軍関係者・在留資格不明以外の者」→治安管理の対象＝力関係下に置く
- 警察やメディアが「A地区で犯罪が増加」という報告・報道→A地区に対する否定的イメージを作り出す→その空間や場所が監視や差別の対象となる（例：新宿区歌舞伎町、部落差別問題）

地政言説と主体 (2)

- 心象地理 (サイト)
 - よその場所、人々、景観、自然についての表象、これらのイメージは表象する者の欲望、空想、想定、そして表象する者と表象される対象との間の力関係を反映する
- 主体の集合的アイデンティティと関わる
 - 自己（私たち）と他者（彼・彼女ら）の区別が基礎

地政言説の構成と物質的基礎 (1)

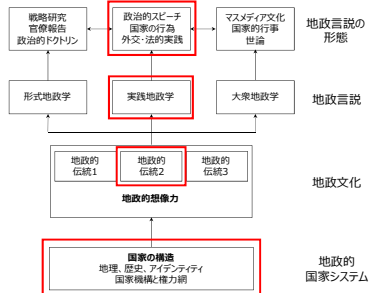
- 言説の要素＝主体の位置、実生活、社会の諸制度（グレゴリー）
- 地政言説の構成
 - 世界政治は特定の国家の地政的位置、物質的な要素（人口・資源・産業・資本）を基礎に語られる

地政言説の構成と物質的基礎 (1)

- 前原元民主党代表の講演（2005年、アメリカ戦略国際問題研究所）
- 日本は、他国との領土問題や海洋権益に関する係争を抱えています。話し合いによる平和的な解決を基本としながらも、日本の主権・権益を守るための防衛力や法律の整備は毅然と行わなければなりません。さらに、日本は四方を海に囲まれる海洋国家ですが、天然資源に乏しく、そして貿易活動が日本経済を根本的に支えていることを考えると、シーレーン防衛は死活的に重要な観点として考慮されなければなりません。1000海里以遠をアメリカに頼っていますが、日本も責任を負うべきだと考えます。



オトウホールによる地政学の構成



地理学研究とスケール (1)

- 日本の地理学研究の方法論的（分析）スケール
- ミクロ/ローカル・スケールの卓越
 - ⇨政治学（ナショナル）、国際関係論（インターナショナル、グローバル）、地域研究（メソ、リージョナル）
 - ←日本地政学の方法論的スケールを「放棄」
- 上位スケールとの政治的相互作用が看過されやすい

地理学研究とスケール（2）

- ・ 現実の政治の展開・作用は**マルチ・スケール**
- ・ 地理的事象の動態的理解に不可欠
- ・ 他の学問分野に弱い←学問固有の方法論的スケール
- ・ 地政言説もそうした性質をもつ = **スケール言説**
- ・ 国家中心主義的な地政言説を相対化

31

スケールと言説（1）

- ・ スケールの政治
 - ・ ローカルな問題の全国化・国際化
沖縄県内の少女暴行事件→日米間のSACO（米軍基地削減）合意
 - ・ グローバル/ナショナルな問題のローカル化
在日米軍基地の移設・再編→沖縄県の「地域問題」
 - ・ スケール（アクター）間での政治的緊張関係

32

スケールと言説（2）

- ・ スケール言説
 - ・ 妊婦死亡事件をめぐって（2008年秋）
 - ・ 舛添厚生労働大臣：医師不足があっても**東京都の医療体制の問題**
 - ・ 石原東京都知事：問題は医師不足で**国の医療行政の責任**
- 医師、病院の責任ではない
- 都内で類似のケース、受け入れ拒否は大都市部で顕著（読売新聞調査）、ただしメディア報道は全国化



https://daigaku.shingakunavi.jp/p/contents/gakumon_daigaku/news/061_2_2/index.html

33

地政言説の分析（1）

- ・ フレーム分析
 - ・ デイヴィッド・スノーほか（1986）
 - ・ 社会運動を「枠づける＝フレーミング」言説に着目
 - ・ 社会運動は**特定の信念、価値観、あるいは世界観のもとに組織され、運動組織は自らの活動を正当化し、敵対する立場や組織の考え方を否定する**。フレーミングとは、そうした運動の理念を言語的（かつ単純明快）に表現する行為
 - ・ 場所・空間に関するフレーミング＝一種の地政言説

34

地政言説の分析（2）

- ・ せめぎあうスケールとフレーミング
 - ・ 対立する政治勢力は**基盤とする地理的スケールを操作しつつ、**
 - ・ **同じ空間・場所について異なる表衆を行い、自らを正当化し、相互に相手の主張を無効化する言説をつくり出す**

35

言説分析の事例（1）

- ・ 沖縄の事例
 - ・ 1995年：沖縄県での少女暴行事件
 - ・ 1996年：沖縄県宜野湾市の普天間基地（海兵隊ヘリコプター基地）の移設条件付き全面返還
 - ・ 1997年：沖縄県名護市辺野古が移設先として浮上

36

言説分析の事例（2）

- ・ 1997年：移設の是非をめぐる住民投票実施
- ・ 移設反対派：サンゴ礁や漁場といった環境が破壊される
- ・ 移設賛成派：基地受け入れの対価となる地域振興の緊要性
- ・ 移設反対派が多数を占めるも、賛成派市長が辞任。続く市長選挙で賛成派候補が当選 → 移設受け入れへ
- ・ 反対運動は現在も継続中

37

沖縄米軍基地の現状



38

名護市 辺野古



39

米軍基地移設をめぐるフレーミングの対立（名護市、1997年）



石川真生『沖縄海上ヘリ基地』高文研、1998年

40

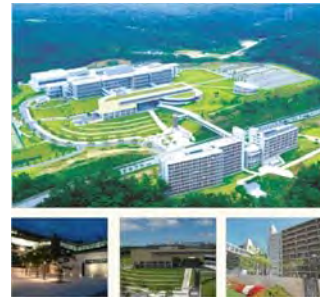
米軍基地移設をめぐるフレーミングの対立（名護市、1997年）



山城博明『報道カメラマンが見た復帰25年 沖縄』沖縄タイムス社、1998年

41

国立沖縄工業専門学校（2004年開学）



<http://www.okinawa-ct.ac.jp/detail.jsp?id=6835&pageStart=0&menuId=2977&funcId=2>

42

辺野古での座り込み（2004年～）



43

地政言説から政治を読む（1）

- ・個人や集団による空間や場所の表象（地政言説）から政治的な意図や権力関係を読み取る
- 地理的観点を通して政治という営みに対する感受性や批判的思考力を高める

44

地政言説から政治を読む（2）

- ・地政言説の構成的基礎への理解＝地理学
- ・ロカリティにセンシティブな地理学の利点を活かし、言説の構成や真実性に対する実証的・批判的検討
- ・例：サマーワ・バグダッド＝「非戦闘地域」（政府見解）、バグダッド＝「戦闘地域」（差し止め訴訟団、名古屋高裁判決）

45